

日本書紀傳 十九卷九

和書
一〇五二二號

五十七

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (66)
函號 85 1

内 一 五 六 八 三 號



教部省
文庫

古事類聚

古事類聚

是時天照太神聞之而曰吾比

コノ
トキ
アケ
テラス
オホミ
カミ
キコシ
メシ
テ
ノタ
シ
ク
オ
アレ
コ
ノ
ゴ
ロ
一ツ可き御事あり一故上件鎮魂の或ハ天照太神
の天上を所知者させ給ふ始り起り天鈿女命之成
り鏡速日命より傳へて宇摩志麻治命亦定ぬし故
由を云ひて外より取り交せし所思えよ長流高下
みけり 古ハ上リエあるぬ際あり各程てみ然るる
をころ成たりけり万葉十五卷不到壹岐島
曾連宅満忽遇鬼死去之時作歌小伊弉比等能伊波
比麻多祢可多夫可母安夜麻知之家年と有る其手
玉をし魂緒として家人の斎ひつるを過ける依
て身亡けりると云ふ其趣ふ所作ハ入ての思て不爲
しりあるめとも其趣ふ所

○日本書紀傳十九

○四百五十二

閑居石窟謂當豐葦原中國必
 爲長夜云何天鈿女命噉樂如
 此者乎乃以御手細閑磐戶窺
 之時手力雄神則奉承天照太
 神之手引而奉出於是中臣神

忌部神則畧以端出之繩
 梨俱梅儼波 乃請勿復還幸

此ハ日神の其祈禱と神樂の事と相感けさせ御在
 して坐て天石窟を出させ給へる所あり然るも天鈿女
 命の神樂の驗のを見えてよふ天兒屋命太玉命の相
 與致其祈禱焉と有ハ此の文よりハ經あり天鈿女命
 の事ハ右ふ又猿女君遠祖云云と有て緯あり右の
 二神の祈禱お感けさせ給へる事ハ其文ハ云含めり

日

水たふふあふりて其專要と有へき事を此ふ云水た
る甚るる遺憶くのけり此事ハ古より記も甚く事略て
傳る水たふふ故ふ中ふの委しき節も無ふ非れど
も此ふ幾らも勝るさゆけり唯古語拾遺の其物既備
掘天香山之五百箇眞賢木而上枝懸玉中枝懸鏡下枝
懸青和幣白和幣令太玉命捧持稱讚亦令天兒屋命相
副祈禱又令天鈿女命云云尔乃太玉命以廣厚稱詞啓
曰吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命を開戸而御覽焉仍太
玉命天兒屋命共致其祈禱焉于時天照太神中心獨謂
此吾幽居天下悉闇群神何由如此之歌樂耶開戸而窺

之と有る此次第少て理甚能通えたり此文不令太玉
命稱讚ハ下小尔乃太玉命以廣厚稱詞啓曰吾之所捧
寶鏡明麗恰如汝命を開戸而御覽焉と有る是少て天
兒屋命のも相副祈禱又下小共致其祈禱と有る此
同ト事を申す中ふの太玉命ハ幣帛を捧る方を主と
し天兒屋命ハ其祈禱をふむ主とし為させ給へりゆ
る其ハ此第三一書ハ太幣帛の事を乃使忌部首遠祖
太玉命執取而廣厚稱詞啓矣于時日神聞之曰頃者
人雖多請未有若此言之麗美者也乃細開磐戸而窺之
と有る右小引る文不合る以て知れり此小人雖

命を如くする
後らざる

命を如くする
後らざる

多請云てハ日神の大御心ハ所思ハ御事ハ了ハ按遺
ハ中心獨謂云々と有ク如ク獨言ハ給ハハる御言ハハ
又細閑磐戸ノ窺ヒ之ハ按遺ハ聊閑戸而窺ヒ之ハ有ク是ハ
リ古事記ハハ即此ハ於テ是ハ天照太御神以為テ怪細閑天
石屋戸而内告者因吾隱坐而以為天原自閤亦葦原中
國皆聞矣何由以天宇受賣者為樂亦八百萬神諸咲ト
有ハ右ノ文ハ續ク所ハ有ク以テ辨ス可キ者ハ有リ
遺ハ比レ吾幽居天下悉閤群神何由如此之歌樂ト云文
を聊閑戸而覽焉ノ先ハ不在ハ誤ハあり此段ハ右ノ文
同ハいハ共ハ不講はり其天兒屋命太玉命ノ所
るハ云ハざるハ故ハ是ハ時ハ天照太神聞之而曰云ハ其
廣キ厚キ稱辭を聞者なる趣ハあり其天兒屋命太玉命ノ
神樂ノ所ハ直ハ續ケるハ其ハ排優ノはハ別

故有る事

又第三書ハ天
兒屋命則以神祝
之於是日神閑磐
戸而出焉ト有ク
此ハ太玉命ノ
共ハ祈禱申サレ
ルハ事ハ見エテ
祈禱申サレ
ルハ由テ日神ノ
出坐ルハ也

ありける然れハ此ハ是時天照太神聞之而曰ト有ハ
者ありト全ク天鈿女命ノ排優ノ事を聞者めテ給ヘルハ如ク
ありト上ノ又猿女君遠祖ト有クハ正ト
文ノ緯ハ多ク其ハ經ハもハ天兒屋命太玉命ノ相與致
其祈禱焉ト有ク受テ事ハ不引る第三書ハ又古
語拾遺ノ文ハ照シ見テ味ハ可シ此ハ以テ見ルハ右
ノ文ハ續テ比レ吾比閑居石屋謂當葦原中國必為
長夜云何天鈿女命噓樂如此者乎乃以御手細閑磐戸
窺之ト有ハ此ハ右ノ第三ノ書ハ日神聞之曰頃者人
雖多請未有若此言之麗美者也乃細閑磐戸而窺之ト

有る歎ふし之此等ハ未御戸を御開クセ御在リ坐さ
め程の御獨言少ク誰窺知奉れる者も亦事ある
を御戸を御開クセ御在リ坐し後ハ再古事記の如く
御言少ク宜ひ出させ給へり少ク其が天鈿女命之御
問答此御事ハ有リ又ハ百萬神も共ハ同奉れる事不
るを此あり其先の事を云て後の事を省くれ古事記
少ハ後の事を詳くふして先の事といは是天照大神
神以為怪の言ハ約めて二度云さりける者あり 其例
古書
共ハ多ク事少ク古語拾遺少ハ思兼神の深思遠慮
の事を委曲不云並べて其如くして行り少ク神等の
所置を云り少ク又御紀ハ古事記ハ諸神の祈禱事等の
件を詳く記さるる其云々の謀を云さるる少ク因り少

事上百五十七下より次り論め然れハ此ハ乃以御
云るを見るあり其意を得てしむ然れハ此ハ乃以御
手細開磐戸窺之時手力雄神云々と文ハ引續き有
る事あり少ク時字と手力雄神との間ハ上ハ吾比閉
居石屋謂當豐葦原中國必為長夜云何天鈿女命噫樂
如此者乎の御言ハ天鈿女命（相對を御在り坐して直云）に御問對の御事ありハ
必再度記され少ク得有り少ク文多きを思ふ可し
故古事記ハ於是天照太御神以為怪細開天石屋戸而
内告者因吾隱坐而以為天原自闇亦葦原中國皆闇矣
何由以天鈿女命受賣者為亦（樂）八百萬神諸咲尔天宇受賣
白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂如此之間天兒屋

命布刀玉命指出其鏡示奉天照太御神之時天照太御
神逾思奇而稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力
男神云こそ有ハ殊ハ詳明ありけり此續きある然
る可くゆけり云る者あり然れハ右ハ擧たる此
神との間ハ此ハ引る古事記の如き文無てハ得有
トリケル所あるを略りたりし者ありけり
一書ハ天鈿命の事ハ皆ぐり載るなりけり
此の例ハ非ざるも其ハ乃細閑磐戸而窺之是
時天手力雄神云こそ有ハ略りたりし者ありけり
又同ハ狀ありて聊閑戸而窺之爰命令天手力雄神云
こそ有て何れハ古事記の委曲ありけり如さけり
又舊事紀ハ其ハ此ハ取合せて文を成せる者あり
又其先後の別を立て又古史成文あり其ハ心
も著れりつと見え殊ハ此一段の文甚と拙きハ
其意を得るめり故に改て天手力雄神則奉承天照太神之手

引而奉出ハ第三一書ハ是時天手力雄神侍磐戸側
則引開之と有り此事古事記ハ天照太御神逾思奇
而稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力雄神取其
御手引出之見え拾遺ハ爰令天手力雄神引啓其扉
遷座新殿之有て御戸を開くハ御手を賜るハ共ハ天
手力雄神一神の行事ありが如しと雖も紀記ハ漏
て傳りてざるあり上二百九十 天手力雄神の下ハ註せり
し如く神宮ハ其傳あり正しく傳りけり其ハ
皇太神宮儀式帳ハ天照皇太神所稱天照意同殿坐神
二座と有る其下ハ坐左方稱天手力男神云こ坐右方

祢萬幡豐秋津姫命也云々に見えたるを倭姫命世記
不此二柱を御戸開闢神と有を始として御鎮坐傳記
御鎮座次第記等亦ハ何れも御戸開闢神と有り前神
と申すハ餘社あり前社之同ト相殿神ハ御在坐
を謂ふ所偕又世記ハ天照太神一座云々相殿神二座
在天兒屋命 右太玉命 有亦ハ別ハ右の二神を記されたる
を御鎮坐本記御鎮坐本縁等ハ外宮御鎮座の御事を
記せりハ依天照太神御託宣中略相殿座神二前止由氣
宮相殿神皇孫命ハ奉陪從留故号止由氣宮相殿而東
西座東天皇孫命一座西天兒屋命太玉命自
云々但東御靈常西相殿並坐給也 你余以往以

天手力男神萬幡豐秋津姫命天照皇太神 乃為相殿神
坐元是号御 戸開神也 有を載せて古史第百五十三段殿天
照太御神の相殿神を天兒屋命太玉命と云ハ雄略天
皇より以前の傳手力男神萬幡豐秋津姫命と云ハ其
より後を云事あり古事記御天降段ハ次手力男神者
縣坐枕那縣と有る其社ハ神名式ハ伊勢國多氣郡佐
奈神社二座と有る是あり其を延會延經の考證ハ太
神の御戸開神と申す由見えたる其一座ハ萬幡豐秋
津姫命ハ當社より太神宮の相殿ハ遷し給へる所
り取之云れたる實不然る説ありハ上九百八十思兼
意云

神の右神の御事不就て委しく考徴せらる如く其萬
 幡豊秋津姫命と申すハ即天鈿女命の御事不御在し
 坐を延喜七年勅進皇太神宮祢宜譜圖帳ハ天手力雄
 命天石門乃左方尔居天乃於須女右方尔居天常世國
 長鳴鳥儲天日影高乎諸命為履天大中臣遠祖天兒
 屋命神祝詞申止之良衣流尔安哉之加利給天石門乎
 開坐伎と有る此を以て天手力雄命天鈿女命二神共
 不御戸開神不御在し坐を事を知へし然る上ハ御戸
 を引開給ひしハ手力雄神不坐し御手を奉承りて引
 出奉承りしハ天鈿女命不御在し坐べき御事著明き

者あるを中故天鈿女命の亦名を天石門別ハ倉比賣
 神と申奉り又其神不並ひて彼三女神とも天津石門別雅姬神とも申奉りて其力合給ひけし事即此第一
 書小出たる雅日女尊の御事不渡らせ御在し坐を事
 傳二十 下不論め云む如し但此傳不ハ磐戸を
 事坐けるを其間より御手を取て引出奉る趣ある
 事あるを其第一書ハ磐戸を引開させ御在し坐
 ち給ふ御手力の方不係列ハ給へハ御手を奉承
 りて引出奉る可程の御暇ハ御在し坐すハ御
 戸開神とし天石門別神とも申奉るがら混ひて手
 力雄神一柱の所置と成て傳れる者もある所見たり
 る借右の手力雄神則奉承天照太神之手引而奉出を
 古語拾遺ハ爰令天子力雄神引啓其扉遷座新殿之

有し右小論め云ると同一例あり其磐戸を開啓奉れ
るハ素より手カ雄神の所為ある可く新殿小遷奉れ
るハ御手を奉承て引出し奉る方の天鈿女命小あり
御在し坐つ可き然るハ其文小相應へて下小令大宮
賣神侍於御前豊磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿門
と有て上小天鈿女命と申せざるを今度ハ其大宮小仕
奉給ふ意を以て大宮賣神と申し又右ハ石戸破る
手カ御在し坐神あるを以て手カ雄神と申しとを其
天石門別の事小依て殿門を守衛とせ給ふ神と成給
ひ又二神小御身を分て豊磐間戸命櫛磐間戸命と申

す御事と成れざるを思ふ可き者あり但右の神等を共
小太玉命之子也と云るハ然る正しき古傳の有ふ其
義を得知さる自註の誤ある者あり古事記御天降段
小天石門別神と手カ男神とを別神の如く擧たるこ
ろハ傳の誤ありけれ次天石戸別神亦名謂櫛石窓神
亦名謂豊石窓神此神者御門之神也と有る此天石戸
別神を手カ雄神と見る時ハ其本末の事甚正しく打
合て少く惑ふ可き節無る可くある所思えたりける
神名式小陸奥國白河郡伊波止和氣神社を頭註ハ手
カ雄命也と有る是あり然る時ハ此前段より云るハ
如く御戸を引啓給ひし手カ

雄神ハ其縁由テ御門神ト成ラセサセ御在リ坐シ
御手を取奉リ給ヒ天鈿女命ハ事其事不就テ大宮
賣神ト成リ又御前ニ侍リハセ給ヘ事甚ク明ク
見エ知ル事ニ有けるを昔より人の心著ク
何事ゾハ次ニ於是中臣神忌部神則界以端出之繩乃
請曰勿復還幸ト有る古事記也即布刀玉命以尻久
米繩控度其御後方自言從此以内不得還入ト見エテ
る此具此ハ天兒屋命の御名を漏セぬ此ハ中臣神
忌部神ト有る勝リなる事ハ上ハ天兒屋命布刀
玉命指出其鏡示奉天照太御神云ト有るハ差別の
有る事あり古語拾遺ハ令太玉命捧持稱讚亦令天兒
屋命相副祈禱ト見エテ太玉命の捧持せるハ相副テ

天兒屋命の祈禱し給へる事傳三十四云云其事此第二書ハ
ハ天兒屋命則以神祝祝之於是日神方開磐戸出焉是
時以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存此即伊勢
崇祕之太神也ト見エたる事其時日神方開
磐戸出焉ト有ハ此ハ奉承天照太神之手引而奉出マ
云よりハ少く以前の事あり古事記ハ天照太御神逾
思奇而稍自戸出而臨坐之時ト有る其時の事ありテ
右ニ以鏡入其石窟云ハ必太玉命ハ御在リ坐ベキ
事右の拾遺の文ハ照シ見テ辨ル可キ事あり然レハ
此ハ磐戸之例ハ隱立シテ手刀雄神ハ其扉を引

今又觸戸小瑕
有るを以て未
磐戸を引啓さ
りし程ハ可
キと思ふ可

啓け神樂の人長と有し天鈿女命ハ御手を取て引出
し奉れる所あり天兒屋命の神祝も成し畢へ太玉
命の鏡も(磐石窟)已不入たる所あり何れ御手
を空しく為給ふ可きも非りけり古事記亦布刀
玉命一神の事ハ為たるハ誤りて必此中臣神忌部
神を相並へたる正しき事如さる者ありし此一
古事記の論うひありけり此亦用無しとや人思
ふ可くしむを必此御紀を合せて云ぐ得有し
き所ある上古史第五十六段を見らふ右の是時以
鏡入其石窟云々の文を此の則界以端出之繩乃請曰
勿復還幸の下継れたるも依り人自然思ひて怪し
と為さるりける事ありし此時ハ己ハ其扉を引啓き
たる所あり如何ぞ戸不觸之云事の有む若て鏡ハ古
事記拾遺ふど有り如く日神示奉る料ふころハ

有けれ己み出させ御在し坐た勿復還幸と申して端
出之繩を控度したる石窟今と成て如何ハ投入る
事の有む但此語ハ於是日神方開磐戸而出焉と有る
全く引出し奉れる時の心事と得心得せしむるハ
依りたる也此亦又古事記ハ故天照太御神出坐之時
高天原及葦原中國自得照明と有し其段の始み於是
天照太御神見畏閉天石屋戸而刺許母理坐也尔高天
原昏暗葦原中國悉闇因此而常夜往と有み對へたる
結あり有けれハ必然無くてハ得有ししりける所
ありむ有けるを此より上ハ其字同く故六合之内
常闇而不知晝夜之相代と有れハ此亦ハ然有む可き
事ありしを此より無くて第三一書ハ是時天手刀雄神

侍磐戸側則引開之者日神之光滿於六合故諸神大喜
と見えたり其委ねて有りけりし事も有り
又其子の始ふ六合の常闇と成りし事を省き載
る可し若て古語拾遺の始ふ乃六合常闇昼夜
不分群神愁迷手足圍措と云て下ふ當此之時上天初
晴衆俱相見云々有る同じ意若て拾遺の右の爰令
味ある事此下云々如し
天手力雄神引啓其扉遷座新殿と有る其文不次て則
天兒屋命太玉命以日御網今斯利久迷纒也廻懸其殿令
大宮賣神侍於御前是太玉命久志備所生如今世内侍
豊磐間戸命擲磐間戸命二神守衛殿門是益太玉と有
る日御網ハ此云云端出之繩の事命之子也日神の出

さして給へる即勿復還幸と申して其天石窟不控度一
たりけり今又其新殿不廻懸ヒキメとて日御網と申す
此ハ右とハ異りて其新殿を出させ御在り坐させ
為ふ堅結ふ義ある可し借此新殿ハ上る思兼神の
深思遠慮の所今午置帆負彦挾知二神以天御量小
介雜古語美豆能伐大峽小峽之材而造瑞殿美阿良可兼作御笠
及矛盾之有る如く石窟を出し奉れる後不任せ奉る
と料ふ兼て儲置と所あり此を以て思兼神の深思遠
慮の及ぶ所其將來と係り違ひざる事に驚き奇しむ許
ふ御在り坐せ御事をなす曉可なりけり借右の先

小作儲たりし御笠及矛盾ハ一此新殿の料ある事
 下四百九日宮の御装束の事の因ハ云々合せ讀て知べし御笠ハ木工神の作
 る所（や）即管笠ある可し太神宮式（装束條）ハ蓋二枚淺紫
 綾表緋綾裏（裏）表各三文頂及角覆錦（枚別）須一丈無淺紫組総
 枚別所須ハ兩但縫料絲（須）二條蓋料二條管
 臨時斟酌請取以下准此緋網四條（蓋料）長各二丈紫
 扇二枚管笠二枚管扇二枚と有る蓋（雄略天皇）後ハ物あると
 小管笠ハ神代より有來る物あり拾遺の崇神天皇段
 小天照太神を遷奉る地を倭笠縫色と云ひ天神本紀
 小笠縫又曾曾笠縫と有る曾ハ顯宗天皇御紀ハ倭
 者彼ハ茅原淺茅原の彼也一ハ茅管あるとの戦く

△右不合せ度會
 宮裝束ハ紫蓋一
 枚管笠一枚紫翳
 一枚管翳一枚之
 見え

形容を云ふなりと所思ゆハ必管笠ある可し借其
 紫蓋管笠小並ひし紫扇管扇と有る神寶條小蓋翳と
 見えたる此あり扇即翳ある事知る然る類の御調
 度ありし此時ハ出来初けむ事知へし其ハ姓氏録（和泉）
 國神別ハ凡工連神魂命男多久豆玉命之後也雄略天
 皇御世造紫蓋凡并奉饒所座仍賜凡工連姓と有る多
 久豆玉命ハ右ハ云る手置帆負命ハ坐を彼神代の例
 として御座の装ハ管蓋管翳を以仕奉りけむを其
 御世ハ紫綾を以て蓋をも翳をも作奉れるり凡工
 連ハ負たる事ありし右等の物を作奉るハ其家

の職掌あるを以て其古の状を想像奉る可くあるに
有ける手置机負神多久豆玉(神)命同神多由ハ天孫
和名抄服玩具不翳本朝式云齋王行具十二枚翳和名
波マ有り統紀云天平十二年戊子朔天皇御大極殿受
朝賀云但奉翳義人更袍袴之有少奉翳を波登理
マ訓即翳取の義あり但此を扇とし云如く物
して御面の頭ハ見えさせ給ふ早く構へたる物
あるハ鳥羽と以て專作れり故ハ波マハ云みや
但右の管笠ハ式ありハ次ハ古語拾遺ハ當此之時上
頭ハ著させ給ふ料ありハ

天初晴衆俱相見面皆明白伸手歌舞相與祢曰阿波禮
言天阿那於茂志呂古語事之甚切皆祢阿那多能志言
晴也阿那言衆面明白也阿那多能志伸
手而舞今指樂事謂阿那佐夜憇竹葉之飲憇木名也振
之多能志此意也

る古事記ハ故天照太御神出坐之時高天原亦葦原中
國自得照明又見之此第三一書ハ是時天手力雄神侍
磐戸側則引開之者日神之光滿於六合故諸神大喜之
見えたる其事此事を如此云るあり借此歌ハ上古より以
來神事の有る毎ハ其神祭の事竟て即直命之云事の
有て謠憐こと所作の有る起る由古史第五十八段
徴み云れたるハ如し予亦其説ハ下百不註して
む但其終ハ尔乃二神俱請曰勿復還幸之有ハ所
出於是中臣神忌部神則界以端出之繩乃請曰勿復還
幸之有如く注連を控度之時の詞あり皇太神を鎮奉り
難し拾遺ハ此所よりハ新殿の内ハ諸神の心打解伊
畢て今ハ直會の時ハ有けり

相樂し程ありて然る心遣の○是時天照太神聞之曰
事過去て後あるを思ふ可し
ハ上小中臣遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命中略相與致
其祈禱焉之有より係ねる事已四百五十三丁小註り如し
其其ハ第三一書小ハ於是天兒屋命中略乃使忌部首遠祖
太玉命執取而廣原祢辭祈啓矣干時日神聞之曰頃者
人雖多請未有若此言之麗美者也之有を合せて曉る可
し但此小又曰猿女君遠祖天鈿女命中略顯神明之憑談
之有より續き次小日神の宣言也給ふ云何天鈿
女噓樂如此者乎又見えたれ其事を聞者し入させ
給へる如くふれ此始末干時八十萬神會合於天

安河辺計其可禱之方之有如く此其祈禱の
方あり甚重りりけねハ神樂ハ其之屬て神の御心を
慰め奉る作を成すありて未ある故小其又曰
書之思ひ弁ふ可者ありり之又此の聞
を聞知らせ御在し聖小常然云ふ之之ハ唯其事
味有る事あり此聞之ハ聽字の義有る俗納受を
云ふ意味有備備其致其祈禱云ハ上四百五十四丁小引る
古語拾遺小乃以廣原祢詞啓曰吾之所捧宝鏡明麗
恰如汝命之開戸而御覽焉仍太玉命天兒屋命共致其
祈禱焉之有是あり其太玉命の祢調云ハ其上小
令太玉命捧持祢讚之有是小古事記此種物

者布刀玉命布刀御幣登取持而之有る其幣帛小就て
壽詞を申されしを云あり吾之所捧ハ万葉二四下小
取持流弓波受乃駿七八下小遠妻持在人者乍偲又二
九海神乎纏持在玉故九三下小一子二子持有跡五十
戸十九二下小吾勢故我捧而持流保宝我之婆之有る
と母多流ハ持有あり現在小持て在み云語あり同し
から十三卷ハ下小月夜見乃持有越水伊取来而公奉
而越得之年物と有る持有ハ己小持て在を云あり
母氏流マ訓来る宝鏡ハ天孫降臨章第二一書ハ天照
事あり別あり奉らせ給ふ所小ハ手持宝鏡授
太神の此鏡を授依一奉らせ給ふ所小ハ手持宝鏡授
天忍德耳尊而祝之曰吾兒視此宝鏡當猶視吾略と有

了上無き宝る由あり明麗ハ四神出生章第一一書
小即大日靈尊略中質性相麗故使照臨天地と有る是亦
り傳九下小云り恰ハ万葉十九二下小吾勢故我捧而
持流保宝我之婆安多可毛似加青蓋と有る續小似た
り名義抄恰不用心也勤也阿多加毛又稱牟基呂と見え
遊仙窟註小當也と云ハ字書不用心也又適當之辞と
見え又名義抄小宛字を阿多加毛又加多知又阿多流
ると有る如く物小引當て云辞みて當哉の義あり如汝命ハ古
事記小尔天宇受賣白言益汝命而貴神在故歡喜咲樂
如此白之間天兒屋命布刀玉命指出其鏡示奉天照太

△天孫降臨章
第一一書小恰
然と有る私記
小非止之久と有
り傳冊二ハ下小
云ハ一

御神之時天照太御神逾思奇而稍自戸出而臨坐之有
 上四百不記傳を引て註せる如く此御鏡の明震
 るを以て其如汝命之益汝命而貴神坐とい申
 せりありを開戸而覽焉之有天兒屋命太玉命の一
 向ふを祈奉り給へる御言あり此を以て聞之
 專其祈禱の方不係れりを知べし委しく云時ハ祈
 筋の事を直不白し神樂の其祈奉る由を云すして先
 神の御心を取奉りて其を祈奉る事を所聞者ハ奉
 用心ハ異なる所有あり○曰を此みてハ意母富志朱
 佐久之訓ハ第三一書不日神聞之曰く有ハ此ハ同
 古事記不逾思奇之云ひ古語拾遺ハ干時天照太神獨

△あり然れども己
 不其御言ふ出きを
 御存し坐しり
 例の能理多之故
 改久と訓可
 可所なり

謂云々之も有る如く未戸をハ開くを所在し坐さり
 し間の御心あり○此ハ許能基呂之訓り第三一書不
 項者人雖多請之見之古語拾遺ハ此吾幽居天下悉
 聞之も有て比之も項者之も作れたり其例ハ海宮遊
 行章不唯赤女赤女鯛 魚名也比有口疾之有を古事記ハ項
 者赤海鯽魚於喉鯁物不得食之有是あり万葉二六
 下不比来不見尔搔入津良武香四三下不比日者奈何
 好去哉又四下比者今歳八往裳六二下不道毛不出戀
 比日八四下不項者之朝聞尔聞者又比日之曉露尔又
 五下沫雪乃比日統而十五下不秋風之寒比来又六下
 七下

△十一上情裏
戀日

△傳三十一百九十
小本一く注
が切く

梅花縦比来者十一十四下下縦比者如是而將通十四十二
下下等思乃許能己呂十五二十下下己能許呂波古非都
追母安良牟又二十下下己能許呂波君牟於毛布等二十多
く云語あり 右等のとありと年頃月頃日頃ると常の
云ふ許呂ハ共小轉の義ありて物の轉り換
るを云語あり年月日時ハ ○閉居石窟の閉居ハ許母
来經二十下下亦異二十下下 ○閉居石窟の閉居ハ許母
理袁理二十下下訓り古事託ハ因吾隱坐云と有る所ハ
り此言の意上百二十下下幽居の下ハ云り儲斯る所の下
小袁理二十下下云ハ古言の格あり天孫降臨章小奇鳥来居
社秋其第二十下下一書小有一神居天八達之衢二十下下の居を
然訓二十下下古事記白檮原宮段大御歌小意伏加能意富

△古語指遺ハ
比吾居之有
今本ハ加久礼袁
理ハ訓り又土依日
記ハ黒鳥二十下下
集二十下下岩二十下下居二十下下
と有り

牟盧夜尔比登佐波尔岐伊理袁理二十下下有る是あり古今
集二十下下胸走り火小心燒け居りとも有る 同記の建
御名方命
段二十下下故尔懼而退居二十下下有るを記傳本小志理叙伎袁理と
訓れ二十下下外二十下下然二十下下事二十下下あり延佳本居を草流二十下下訓り二十下下古言
の格二十下下外二十下下 ○為長夜二十下下ハ上小故六合之内常闇而不知登
夜之相代二十下下有る事を詔給へるあり古事記ハ因吾
隱坐而以為天原自闇亦葦原中國皆闇矣二十下下有る是カ
り儲古事記二十下下ハ右の六合之内常闇而云と云事を
尔高天原皆二十下下闇二十下下葦原中國悉二十下下闇二十下下因此而常夜往二十下下有る其
事上百三十下下三三十下下不註る三十下下如三十下下其常夜往三十下下此為長夜之同
訓同義の言あり記傳ハ二十下下小常夜往ハ登許用由久

○日本書紀傳十九

○四百六十九

又七十四世間
者信二代者不
往有之と有か

公王三十四年
乃行易及先
小去更年緒長
奈我久又十二
荒玉能年街更
春去者云々

と訓へし常夜とハ常不夜のそめて昼無きと云り往
とハ凡て年月日時^{フシツネクラム}の経往くと云ひ此ハ晝の無て
唯夜のそめて時を經行くとあり万葉四下不相夜不
相夜ニ走良武と有ハ相夜行と不相夜行と二あり又
五十空蟬乃代也毛二行ぞハ人世ハ死て又二度ハ經
行ぬ世と云あり九下ハ常之陪尔夏冬往哉と有る此
ハ正しく此と同じ十四下ハ一年二遍不行秋山乎後
撰集子弥生不閏月有る年略貫之餘とへ有て行へり
年たふも云と有る是等の行ふて心得べし旧事記
不往常世國と云ふハ此の往てふ言を心得難て安不

云て僻事あり神功皇后御紀不晝暗如夜已經多日一時
人曰常夜行之也と云事ハ見ゆ^採所見たり^{但此の爲}
も右の常夜行之も共不登許用由久と云へき所あり
不今本不登許夜美由久と訓ふハ委しとふ過て却り
て誤あり闇とい夜の深くして暗き状あるをこそ云
へ此ハ唯夜のそ行たりしあるハ闇と相違ハ無れど
も然ハ云べき上ハ出たる思兼神を古事記ハ常世
思兼神と有り又此の常世之長鳴鳥を其記ハ然書
せりハ共不夜と世と其唱の同一き任不借用ひられ
たりふらろ有けれ常世ハ長夜の義ありけれハ常世
國ありと云とハ固より等しくこそる者あり然れハ右
不云れたり如く舊事紀ハ往常世國と云ひ祢宜譜

圖帳ナ常世國長鳴鳥ナ有ナ事の意を得知すし
 て校意ナ國字を添たる漫言あり常夜往ト長トへ
 小夜ノ成テ年月の經行たりしをコ云メ此
 を往常世國マ云時ハ日神の徳結ふ為
 其ナ移往へる事と成り又常世國永鳴鳥マ云時ハ此
 常世國マ云より来りたる永鳴鳥マ云事成テ共
 小此時小世中ハ常夜のニ行たりし義理ナ違ふ事ナ
 れハ其ニ共ナ國字決めて中古ナ出来ぬ校意ナ
 者ナ然ル時ハ常世思金神マ申マあじ常世
國の神マ成を如何ナ為シ彼宝劍出
 章第六一書ナ少彦命ノ御事マ至常世御矣マ
 有マ更ナ事ノ趣甚異ル者ナあり思混ス可クナリ

非ずシ○噓樂ノ噓ハ本ナ噓マ有ル也ト其ハ略字ナあり
ハ天孫降臨章第六一書ナ笑噓マ作ル小比較セて今
 此マ改メ纂疏本ナ噓ナ作ルハ愈誤ル者ナあり借此
 の噓樂マ古語拾遺ノ歌樂マ共ナ引合セて惠良
 具マ訓ルハ略ナあり口訣噓樂者笑遊也有ル依リ又
 良岐マ訓レ樂字を阿蘇夫マ訓ヒ可シ下略ト有ル例ナ
 任セて右ノ二マをト惠良岐阿蘇夫マ多ク訓ヘクリけ
 る若ク其噓ノ惠ハ一ト已ハ八洲起元章第六一書ナ
 妍哉此云阿那而惠夜ノ惠ナ傳六ハ下小云ル如
 く笑ノ本語ナあり字鏡集名義抄ナ笑マ部ナ笑マ共ナ

惠和良布と有ハ惠ハ笑ハ貌和良布ハ聲ハ出ルヲ云
ム由己ル上四百三ハ云リ和名抄ハ靨面ハ下也和名
患久保之見之笑顔ヲ惠賀保ト云ムと惠ハ即咲笑
貌ヲ云言ム例アリ記傳ハ引也雄略天皇二年御紀ハ天皇見采
女面貌端麗形容温雅乃和顔悦色曰朕豈不欲觀汝妍
咲乃相携ハ入於後宮語太后曰中皇太后視天皇悦歡
喜盈懷之見之續紀廿六卷大嘗祭豐明詔ハ今勅久今
日方大新嘗乃猶良比能豐明聞食日ハ中在略由紀須伎
二國乃獻礼黑紀白紀能御酒ハ赤丹乃保仁多末倍惠
良伎常毛賜酒樂幣乃物乎賜利以天退略又三十卷詔

ハハ故是以黑記白記乃御酒食倍惠良伎常毛賜酒幣
乃物賜礼止又三代實錄四十六卷子宣詔曰中略黑支
白支乃御酒赤丹德ハ食惠良伎罷下ハ有ハ更アリ
儀式大嘗祭會辰日儀ハ今日波大嘗乃直會乃豐樂聞食
日ハ在故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃德ハ食惠良伎
罷略又新嘗會儀ハ黑岐白岐乃御酒赤丹乃德食惠良
岐退止云ハ正月七日儀ハ今日波正月七日乃豐樂聞
食須日ハ在故是以御酒食間惠良岐云ハ正月十六日
踏歌儀ハ故是以踏歌見御酒食間惠良伎云ハ九月九
日菊花宴儀ハ菊花豐樂聞食日ハ在故是以御酒食

宇良宜等
 土託仁多郡三津
 御子乘取而轉
 巡八十嶋宇良宜志
 給軒猶不止笑之
 之有ハ惠良加須
 事次ハ異ハ宜
 の言ハ思合ハ可

信惠良岐退止為比奈云こ有り万葉十九此言ハ二十小豊
 宴見為今日者毛能乃布能八十伴雄能島山尔安可流
 橋宇受尔指紐解放而千年保伎保伎吉等餘毛之惠良
 惠良尔仕奉子見之貴在と有る笑咲ふ意ある惠良小
 岐ハ舉の辞ハ添れりありけり（原行天皇二十七年御紀）宴樂を宇多宜と云こ
作らる共謠舉きて謠舉け祝動し寸意を以て言ひ同記明宮段
 小於是天皇宇羅宜是所獻之大御酒と有る情奉ふて
 心の浮るるを云り然れハ惠良岐ハ噓奉ふて心の笑
 之浮るるを云事此を以て知へき者なり然れハ記傳
 ハ咲榮え樂しむを云こと云れり其意ハ然る事な
 り猶未益さる所所有尔似たり借此惠の言を試る

小咲を惠年と云ハ笑聚みて咲ハ事の聚る意
 あり靈異記ハ潮を惠豆良加志と訓ハ咲列加志ハ
 可笑しき事の多在る狀を云り又新撰字鏡ハ頻呻
 暢五体而息心之貌乃比須又惠奈久と有る名義抄ハ
 暢の義ハ通ゆハ又許呂能昆と訓ハ又字鏡集ハ醒又轉
 又酌を惠布と云ハ依加夜麻比と訓ハ又惠布
 ハ咲振ふる神功皇后十三年御紀ハ壽觴御歌ハ等豫
 保枳保枳茂苦陪之詞武保枳保枳流保之と有る以て
 曉る可し又同集ハ榮を榮を惠具流と有ハ咲狂の義
 本マして活機ける此等の類惠を借此ハ古事記ハ於是
 天照太御神略何由以天皇受賣者為樂亦八百刀神諸
 咲尔天皇受賣貴白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂と
 有て日神の御言ハ無くして却て天鈿女命の御對
 尔在る然れども八百萬神ハ諸咲又有ハ記の歡喜エラ

咲此の噓ウソ不當り天鈿女命アマノハコメ為樂ヲ有ハ記キも此ハ
也樂ヲ有テ右の如く樂ヲ咲ヲ別ワテも噓樂ウソガク之言を
續けたるも其意同しけれハ古事記の文章の巧ある
事驚く許るハ賞たりける樂字を阿曾夫アソノウヂの訓ハ例
證ハ上三百九十一下十一ハ己ハ神樂の訓の事ハ就テ云ハ猶記
傳ハ上六十一下二十ハ小樂ハ阿曾昆アソノヒメの訓べし仁ニテ樂ハ和名抄ハ
雅樂寮宇多麻比乃豆加依マヒノマシ見之顯宗天皇御紀ハ奏ウタ
樂ヲ有テ有テ訓直キコシスしく聞ゆれども猶阿蘇昆アソノヒメの訓ハ
宜けむ後世も此段の樂を即神遊カミユリ之云り古今集ハ
見ゆ落窪物語ハ樂を阿蘇昆賀久アソノヒメカキも重ぬても云り

訶志比宮段ハ猶阿蘇婆磨其大御琴オソノハ有リ借書紀ハ
噓樂ウソガク有ハ鈿女命ニギハヤヒノメを奉テ諸神を兼カね拾遺ハ歌樂ウタガク之
有ハ群神を奉テ鈿女命ニギハヤヒノメを會カめたり此記ハ天宇受
賣命ウツセウメノメ之諸神カミ之を並ナへ奉たり引合ヒキアせて見ミる可カし珠之
云れたるハ甚詳ある辨あり此ハ明アキラく可カくある
又同書歡喜咲樂ウツセウメノメの下ハ上三百九十一下十一ハ能優ノウハ可笑ウツセウメノメを
咲ウツセウメノメあり惠良具ヱニヤクハ此ハ宇受賣命ウツセウメノメの謀りて
申ウツセウメノメテ詞コトあり己ミハ能優ノウ之諸神カミの咲ウツセウメノメハ合カせて眞實
ハ何ナニに樂ヲハ遊ユハ狀カタハ成ナるあり故歡喜ウツセウメノメの二
字ジを加カへたり心ココロ○以御手細開磐戸ミタノコノヒラキ窺ノゾク之ハ第三サンノ書
也乃細開磐戸コノヒラキ窺ノゾク之と有り共ハ細開コノヒラキを本曾ホノソノ未ミハ阿
祁ア氏シ之訓付たり古事記コトワザハ是コト天照太御神アマテラスノミカミ以為怪

△東屋行障子の細目不明なる落
 注二上ハ小例のやう
 小鏡もも刺園
 めてみればけり云々
 恐ひ來て見らば
 細目の明れり杖衣
 二上ハ小例のやう
 小開て先出
 見ゆ中治拾遺前
 を殺し叩きけり
 れ云々且ト下
 き物志ありと細
 目開て入れ給へま
 本十五小月夜の
 細目小窓開て
 左遺れり哥詠め
 うかたを見えん又
 日本紀竟言言可
 集詞書白細目の
 岩戸を開て見ら
 ぶハ云々又
 又此訓全澤本
 六中加質比多麻
 布と訓る具此
 カハヘリ

細開天石屋戸而内告者云云有り此ハ開字を記
 傳不此良伎氏之訓れたり共ハ細開と有ハ古語拾遺
 小聊開戸而窺之と有て同し事あり源氏常夏卷ハ猶
 細目不明なるを帝夏十九
 妻戸の細目あるより障子の開たるを見入れ給ふ
 見え猶東屋卷より其語見えたり此御紀ハ訓ハ依
 りて書る文ある可ハハ古言ある事知べ
 の米ハ所見の切りたる辞あり拾遺集物名ハ都婆久
 良米を隱して難波津ハ開目ハのこが云々と詠る目
 之見えたり
 儲此ハ細開磐戸窺之時乎力雄神則云々
 之有る事あるをハ上 四百五十五丁子已ハ論めざるハ如く
 右件是時天照太神聞之而曰云云何天鈿女命噫樂

如此者乎と有るハ日神の未磐戸を開く世御在
 坐ざり以前ハ磐戸の内みて獨言せ給へる御言ハ
 る事拾遺ハ平時天照太神中心獨謂比吾幽居天下悉
 聞群神何由如此之歌樂聊開戸而窺之と有を合せて
 知へハ然れハ此ハ拾遺ハ此ハ略くハ有るハ
 細開磐戸窺之と有る文ハ續てハ右ハ引る古事記ハ
 於是天照太御神以為怪細開天石屋戸而内告者因吾
 隱坐而以為天原自聞亦葦原中國皆聞矣何由以天宇
 受賣者為樂亦八百万神諸咲尔天宇受賣白言益汝命
 而貴神坐故歡喜咲樂如此言之間天兒屋命布刀玉命

指出其鏡示奉(示)天照太御神之時天照太御神逾思言
而稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天牟刀男神云々
と所見たる此文無き事理相貫通ざる有べき
然れど此御紀之拾遺み天照太神の御戸を開くを
御在り坐さるし以前に獨言の傳りて御戸を細
問ふ聞さる給ひて天鈿女命の詔給へりし御問答の
御事御在り坐さる古事記の其事の如く委曲な
れども先づ詔給へりし御言を漏せざる者あり相合せ
て其次第有る事をあむ曉る可なりける此事み限る
ず古事記の然る同事の重復 借右に細問天石屋戸而
れるみい旁を略く事多在り て天鈿命を指して詔給
内告者之有ハ此時磐戸を細問させ御在り坐ける故
不御言の外に漏聞え給へるふり故此を以て御紀之
拾遺みとて右に獨言給へりし御言ありとハ云ふ

り内告ハ託傳不此上不自字心有べき事あり下沼河
比賣段不未開戸自内歌曰マ有ハ似たる文ありと云
れたり如一天原自闇亦葦原中國皆闇矣之有ハ記
の上文不尔高天原皆闇時葦原中國悉闇因此而常夜
往と有ハ對へるあり此ハ上文不故六合之内常闇而
不知晝夜之相代マ有れ此ハ天原之り高天原と
り有へり答ふるハ謂當豐葦原中國必為長夜マ有ハ
字の脱たりあり自闇の自ハ同記不故天照太御神
出坐之時高天原及葦原中國自得照明と有て日神
の石室不隱させ給へハ自然ふりて世中ハ闇と成り

今二傳ふ云を
老合をてよ

磐戸を出させ御在し坐せし天地ハ自然不照明るく
成る少く掛まると甚し可畏き日太御神の質性不し
も備りり坐る大御徳の己ヲレも奇異小大座坐事此不
在り記傳不右の二の自を乃スルマ云不述ト云ねたる
ハ違ふ可シ皆闇ハ上ニも皆暗悉闇之有う如く世中
ハ皆悉不黒闇しとあり闇の意傳十二十四不云り何
由以天宇受賣者為樂亦八百萬神諸咲之此不噓樂之
有る噓ハ咲不當り樂ハ為樂不當りて其ト意なる由
右四百七不許ルり如ク此ノ日神の獨言
右十三下御戸を御開クせ所在し坐て直らふ天宇受賣
命不問給へる大御言あり思ひ混へて一不為る事勿

れ尔天宇受賣云てハ上件天照太御神の大御言不御
對へ申せり言あり益汝命の汝命ハ日神を申せり古
語拾遺不乃太玉命中略吾之所捧宝鏡明麗恰如汝命と
も有り益マナヒハ記傳不麻佐理此之訓へし古事記海神官
段不有人坐我井上香木之上甚麗壯夫也益我王而甚
貴之有不似たり其事を此ノ海宮遊行章第八一書
不吾謂我王獨能絶麗今有一客弥後遠勝之有をや思
ハねたりけむ記傳不此の益ハ勝字の意あり麻佐留
ハ益を延たるとして本同言あり故益字を通りて如
此ハ書とありと所見たる是あり儲其貴神坐と申せ

鏡本より焔所
見の意ある事ハ
然る物を猶

るハ即上ノ謂ゆる八咫鏡の御事あり此第一ノ書ハ
思兼神云者有思慮之智乃思而白曰宜圖造彼神之象
而奉招禱也と云ひ古語拾遺中ハ仍令石凝姥神取天
香山銅以鑄日像之鏡中略於是從思兼神議令石凝姥神
鑄日像之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國次度所鑄其
狀美麗是伊勢太神也是伊勢ふと有る上二百七十七み云る如く實ハ
天日の形容ありし作奉れども然其光の明麗しきを
以て貴神坐マ申して日神を怪しよせ奉るものとハ謀
るにたりし者ありけり歡喜咲樂ハ己ハ註せる日神
の御言ハ天宇受賣者為樂亦八百萬神諸咲マ詔給ハ

るハ對奉りて汝命ハ御在リ坐す成ても汝命ハ勝り
て世中を御照し坐す貴神の御在リ坐す樂しめて
咲ひも一遊ひも為て居る事マ申せるもて記傳ハ
此ハ宇受賣命の謀りて申す詞あり己ハ俳優之諸神
の咲ひマを合せて眞實ハ何れも樂しと遊ぶ状ハ云
成せるありと有る如し但此歡喜咲樂の言ハ此あり
命嚙樂如此者乎之詔給ハ日神の御言ハ云何天鈿女
同しうさる趣ある事己ハ云りさ如此言之間マハ
日神と天鈿女命の御問對の間あり天兒屋命存カ
玉命云々ハ右引る拾遺ハ吾之所捧宝鏡明麗恰如
汝命ハ問戸而御覽焉仍太玉命天兒屋命共致其祈禱

焉と所見たれる二柱神相並りて其御祈の事を仕
奉り給へる時の事あり指出其鏡の記傳ハ即上文の
賢木ハ懸たるハ咫鏡ありと有り如し示奉ハ記傳ハ
美世麻都流ト訓べし顯宗天皇元年御紀ハ請以奉示
孝徳天皇二年御紀ハ宜ビ觀國ト壇ト或書或圖持來奉
示ミ有りハ此御鏡を見せ奉ルるハ日神の御光
移りて全等トて照炫やくを以て汝命ハ勝りて尊
神ハ即此御鏡を申し成せる者あり如此為ハ甚
淺ハありハ似たれト上代の意あり後世の生賢
しハ心を以て疑ふ事勿れハ此御鏡ハ日像之鏡ト申

して日神の御像を摸リ又其御光の移れトを以て
汝命ト等ト同トしハ神トとシ申す可きを益貴ト云
ふハ甚トく云成せる者あり彼日蔭漫トを為スるハ上
小此鬘を頭より垂ルるハ日光の羞ユ明トを指隔つる
斜あり鷄を鳴せたるハ皆此貴神坐て世を照シ給ハ
事日神ハ同トく御在リ坐シ由ヲ示シ奉ル者あり
と有ハ甚詳ありハ解説ありハ逾思奇ハ記傳ハ
此御鏡の已命ト等ト同トく照明ハけきを御覽ハ坐
て實ハ不レ受賣の申せる如く貴神坐す事ハ奇ト
思ハありハよハ以為怪ト有ハを養テ逾ト云ハありト

△臨坐之時此細
 開磐戸之類之有
 不聞之幸加布又
 乃曾无と有る如く
 能曾久と同一今
 思ふも臨之類も
 意異なるも如く
 松小藤懸れり
 源氏権本卷あり水
 不能曾伎たる
 有る相通ひて本
 同言ありたり但此
 自戸出而有り
 物の間を隔て
 又少異も有る
 の情状を伺身給
 意ありと有る
 如く

有り如く稍自戸出而の稍ハ記傳ハ今世の言ハ漸々
 小と云意ありと有り此ハ天鈿女命（命ハ益貴神坐と）の申すハ違ひず
 實ハ貴神の坐を依り見え又八百戸神の嘯樂する事共の甚
 けは奇しき先ハ御怒坐て入らせ御在り坐し御事
 をも何れ打忘れさせ御在り坐て其貴神の消息を見
 行ハる坐し我知ず不意ハ浮れ出させ給へるハ
 如此為る間ハ天手力雄神ハ磐戸を押開き天鈿女
 命ハ御手を奉承りて引出し奉り天兒屋命太玉命ハ
 其御鏡を石窟ハ投入りて直ニ端出之繩を界以すハ
 と諸共小手筈を違へず行奉らせ給へるハ其間置ず
 甚々急劇し謀りけりし（事）斯る類例ハ景行天皇四
 年御記ハ天皇幸美濃左

右奏言之茲國有佳人曰茅媛云々天皇欲得為妃幸弟
 媛之家弟媛聞乘輿車駕於是天皇權令弟媛至而居于
 泳宮鯉魚浮池朝夕臨視而戲遊時弟媛欲見其鯉魚而
 密來臨池天皇則留而通之有ハ如く天皇の弟媛を
 娶給りハ弟媛を至らめハ謀を設けて池ハ鯉を放
 ちて朝夕ハ臨行ハ種々の戲遊を成して其出來
 成て池ハ臨むなる所を留坐し如く右ハ全ハ同
 坐し事を待奉る意味の似○手力雄神ハ上ハ亦以手
 力雄神立磐戸之側と有る是あり第三一書あり乃細
 開磐戸而窺之是時天手力雄神侍磐戸側則引開之者
 日神之光滿於六合見之古事記も右ハ引る文ハ統
 きて稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力男神取

其御手引出し見え古事拾遺より爰令手力雄神引啓
其扉遷座新殿と有て何れ一神の趣あり其ハ
已四百五神宮御戸開神ハ二神ハ御在し坐す御名
證據共を引て註る如く此ハ次めて天鈿女命の
漏落たる者ありけり其ハ延喜七年勅進皇太神宮祢
亘譜圖帳ハ天手力雄命天石門乃左方尔居天乃旋須
女右方尔居天云々有る如く此二神少て御戸開の
御功ハ成し給へりし者あり然るハ手力雄神ハ豫て
磐戸側ハ隱立し御在し坐けるハ天鈿女命ハハ初
ハ巧作能優の御事有り次ハ此ハ日神と御問對の

御事御在し坐せハ何時の隙を得てハ手力雄神と
左右ハ相並ひ坐せる御暇の御在し坐むと一應ハ予
ハ心行ず思入りしを其ころハ猶思慮の至の甚々淺
くりけね然るハ右ハ引る古事記ハ尔天宇受賣白言
益汝命而貴神坐故歡喜咲樂と有る此より其御答
の事畢りて次ハ如此言之間天兒屋命布刀玉命指
出其鏡示奉天照太御神云々有て次ハ日神ハ對
ひて物申す事其二神ハ移れず天鈿女命ハ日神の
其御鏡ハ向ハし給ふ程ハ御許近く天磐石戸の右側ハ
進寄給ひて手力雄神の御戸を抛棄給ふと諸共ハ御

手を取て引出し奉給ひけむと思ゆれハ決めて此小
手カ雄神則奉承天照太神之手引而奉出と有る語
の漏たる所有をある知へりける所ある若て此ハ
神を新殿小遷座し奉り所小令大宮賣神侍拾遺の日
豊磐間戸命命擲磐間戸命二神守衛殿門と有る不應く所
ありふ心を潜めて思ふ可く又日神ハ一女神御
在し坐坐物を然る男神の御手を取奉るあり云々無
礼けある事の有へく然れハ手雄神の御手を取奉る
と云ハ此と古事記との上みのと有る事あり熟見以
て行く小此第三二書小侍磐戸側則引開之者日神之
光満於六合と有る磐戸を引開させ奉給へるのこ
ろ有けれ御手を奉承りて此神の引出し奉れる状と

△小後ハ良海本を
見れば此の引而奉
出の細書ハ一日
日カ雄神奉出
天照太神時引
放其山名信州
戸隱山則是也
有る州戸ハ後ハ
書換つるからめ
と決めて古傳
するを後ハ此傳
り者あり此傳
共に見ゆれのみ
らず戸隱者何
云往昔カカ相命
引啓天照太神
具門扉瑞穂國
即化爲山今ラ
隱山因之云々
有て遣ふる事
一在れ

一も見え又拾遺小令天手カ雄神引啓其扉遷座新
殿と有る其扉を引開け新殿小遷し奉る迄一神の
所作の如く見ゆれども其片手小扉を持ち其片手以
て御手を取奉る事ハ如何ある手カ雄神と申せども
容易く成一遂給ふ可き事非れハ此小新殿小遷し奉
れる事ハ別小神有るを傳漏せる者あり借神名帳頭
書又神社考等小手カ雄命以其所取石戸抛空此即落
而成山信濃國戸隱山是也と有る此時小引開給へり
し磐戸の落て山と成れる傳ある事疑ふ可く小合せて柳生系圖
小春日社記曰昔天照太神開天磐戸出現時天香久山

今神名式小大和國漆
上郡天乃石立神社
有て今御生村
岩戸谷御生村
乃石立神と申す
手力雄神の此御
在し此御名不
て信濃國戸隠
神と申奉る類
此

岩戸分爲兩其一者飛行於虛空其一者留在大和國
其處曰神戶岩と有る此を以ても手力雄命の磐戸を
取て抛させ給へる事の由縁ありざるを知らず此
因て御手を奉承て引出し奉れる神の別不無し得
有る事事々を曉る可くも右等の傳の說ハ第三
戸側引開之の下云べし傳二十二卷百廿一丁ハ
云へし但右の春日社記ハ群書類從十七卷百廿一丁ハ
社記ハ別本ハ所見たり其社記ハ内院大刀辛雄
明神飛來天神ハ龍神是也有る春日大明神蛭跡小
社記ハ御室殿辰己大刀辛雄明神其北裏飛來天神其
北并ハ龍神王と有る共ハ怪しき書狀あり其義理
を分別するハ大刀辛雄神ハ神社考ハ神書抄曰伊勢内
宮相殿左脇祭此神云て為春日別社或云戸隠明神是
也云云合り又飛來天神ハ申すハ磐戸を取て地不
抛落し給へるを以て云ひハ龍神と云ハ信濃國戸隠

今神名式小伊豆國
田方郡引手力命
神社と有る磐
戸と引開を給
へる由の御名あり
借又

神を俗小九頭龍權現と申す混れり出來れる名
る事傳十二卷百二十六丁大國極御魂神の下考合
す可き事あり何れも有れ此地ハ手力雄神の御在
坐すハ右の由緒の如し此地ハ殊小天兒屋命の由
有る神事下云ふハ土佐國吾川郡天石門別安國
玉主死神社小就て註す事の有るを思合す可き者あり
上百九十 手力雄神の下引る万葉三四十河内王葬
豊前國鏡山之時手持女王作歌三首の中ハ豊國乃鏡
山之石戸立隠尔計良之思と有ハ此段の故事を以て
詠ねたる者あり其歌不並ひし石戸破手力毛欲得
と有ハ又其事不就て此神の御功を顯ハし詠るハ然
る物あり古事記御天降段ハ天石戸門別神と手力
男神とを其社の事を主と云むら為る亦名ふる事を

全依風土記不石帆
別命今天石門別
命之有也然然子
御名も御在し坐
つるあり猶

書し漏されし有るも實少し手力雄神と申す
本名あり其天磐戸を開給ひしより天石戸別神と
負坐りあり故古史策百三十三段微不上代本記小天
児屋命太玉命を豊受宮に陪從せしより以来以天手
力男神萬幡豊秋津姫命天照皇太神乃為相殿神元是
戸開と云ひ世記も御戸開神二座天手力男神格
幡千千姫命之見え神名帳頭註も陸奥國白河郡伊
波止和氣神社を手力雄命也と云ふを以て手力
男神石門別神一神あり事を惜る可しと云はれり又
神名式小伊豆國賀茂郡伊波氏別命神社此ハ天石門

別神小御在し坐す事論無きと同郡伊波久良和氣命
神社那賀郡石倉命神社見えたる並以小叅河國宝飢
郡石座神社越前國敦賀郡伊部磐座神社大野郡磐座
神社大槻磐座神社高旌磐座神社之有る中少く石座
の字の如くあるも有へしれども伊豆國なるハ石倉
は即天石窟の事あり此を伊波久良和氣と云て石
門別不同し可し其ハ後の物あり豊葦原卜定
記小天神母感玉比岩戸弘開玉波手力雄神引出奉
利再常闇乃雲晴奉利其籠玉之磐戸片闇波投弃給布
時落天今乃西石座止成利其片闇波今岩倉乃里仁留

不云を考近江国伊香郡天石門別命神社陸奥国白河
合可一郡伊波止和氣神社美作国英多郡天石門別神社備前
国御野郡石門別神社此今田住村坐云云又石
門別神社今在大住村称户隠宮云云上云云手
力雄神同神ある事を徴す足水又清和天皇實録
不貞觀五月日授安藝國無位天磐戸別神從五
位下之有ハ式内也神階の御事有ハ稀あるハ此ハ
式外子ハ坐せし止事無キ御社有可クヤ又神名
式不土佐國吾川郡天石門別安國玉主天神社有リ此
玉主神ハ藤原系圖ハ天兒屋命本系帳云興登魂尊娶

玉主命之女許登能麻遲媛命所生之有是あり大石
門別て申すハ此時の御功用不依て冠を奉り安國
玉主神と申すハ天孫降臨章不所見たる天國王神と
申す此神の御事ありて安國ハ天磐戸を引開給
ひて國土を安寧く成給へる意玉主ハ其恩頼を
幸ハへさせ御在坐主宰の神と申すあり皆此時
の御功用不依れ御名ある御在坐ける儲上百
三下太玉命の出自の所不云る如く此神の御女許登
能麻遲媛命ハ右の如く興台産靈神の後神と御在
坐ある猶古語拾遺を攷る其高皇産靈神所生之

女名曰栲幡千千姬命今其男名曰天忍日命又男名曰天
 太玉命と有る高皇產靈神所生と有る傳の誤るるが
 右の三神の兄弟坐す由あり然る言あり其栲幡
 千々姫命も諸書も天忍德耳尊の后神ある傳の有り
 母子の間不就て混ひたりし者あり實も天兒屋命
 の后神不渡らせ給ひて謂ゆる天鈿女命亦名大宮比
 咩命坐す由已百八十不註せるが如し斯れも天手
 カ雄神ハハも天兒屋命の御為ふハ外祖不坐し婦翁
 不渡らせ給へり此を以て右不引る春日社記も内院
 大力刀辛手雄明神と有り又攝津國も天石門別神社須久

久神社相並はせ御在し坐す所由の少縁ありさる音
 を曉る可くあり又右不引る天孫降臨章も天國玉之
 郡石座神社を摠國風土記も石座神社所祭天稚彦也
 と有る伊波久良和氣神と申す其亦名あり事不明
 り高彦根神の后神阿波神を土佐風土記も天野有朝
 倉郷中見之社名天津羽々神天石帆別神今天石門
 別神也と見えたるも神名式も同國土佐郡都佐坐
 神社大と有る此ハ一言主命も由風土記も見たり
 水味高彦根神の荒魂不坐す事傳十卷三百五十
 四下十五卷二百十八下不註るが如し同郡朝倉神社
 も見えたるハ右の天石門別安國玉主天神其由緒
 不就て鎮坐ありけり猶神名式も遠江國依野郡已等
 乃麻知神社阿波の神並坐すも共手力雄神の
 御女不し姉妹の間不御在し坐す故あり可し
 ○奉承天照太神之手を古事記も取其御手と有り

記傳八五下不此取字を舊く多麻波理氏と訓り書紀
ふハ奉承と書る其をも然訓り然れと此訓ハ後世の
語格コハツキふハ猶字の任登理氏訓べしと有り古事記高津宮
改歌不伊波迦岩伎加泥難互和賀互登良須母又皇極齋明天皇
三年御紀歌不武舸都烏尔陀底屢制羅我你古祢拳曾
倭我底鳴騰羅每拖我手取我佐基泥基幸手の幸手泥佐曾母野我手取倭我底騰羅
須謀野ふと見え万葉三三下不草取可奈和妹手手取
七七下不君之手取者將縁言義又十二四下不妹手手取石
池之と続けたるふと有て登流と云方例も多在れど
も此不殊更ハ奉承の字をしも書れたるハ多麻波理

氏と訓へべき為不目易く書るふ可けれハ古事記の
例も從ひ難且御手を登流と云時ハ餘り不無
然礼無き言ふハ訓成し奉らる可き假令中昔の語の様
八十不論の云るり如く此時ふハ手カ雄神ハ天
磐戸を引啓らせ給ひけれハ其御手を奉承りて引出
し奉るれハ決く天鈿女命ある御在し坐へり
ハるを此ふハ其神の俳優ふと仕奉るれハ事繁
く御在し坐す状あるふ混れて其御名ハ此不漏てふ
む有ける然れども神宮の古傳ハ天手カ男神萬幡豊
秋津姬命を御戸開神と申して天照太神の相殿神と

成し奉りし事と此の故事に根據て少縁の所縁にハ
非る不獨乎カ雄神の御戸開の御功用の較略較ハ
む詳ふハ傳りけり然る不其本社ハ神名式不伊
勢國多氣郡佐那神社二座と有る古事記御天降段ハ
ハ次乎カ雄神者坐佐那縣也と見え此不既く萬幡
豊秋津姫命の御名を漏したれども今一神ハ必其神
ふむ事雄略天皇御世より以來右の二神を皇太神
宮の相殿神と成し奉りて御戸開神と申せるを以て
知べし又神名式不武藏國是立郡多氣比賣神社を風
土記不多磨郡稻直郷多氣比賣神社所祭考幡千姫

命也と有る伊勢の多氣郡より移祀せし由ふと不依
り多氣比賣神と申すと聞ゆる事をも思合せて此
神の佐那神社不御在し坐す二座の中なる事を曉る
可し但神名式不ハ足立郡なるを風土記不ハ多磨郡
ヤ和名抄郷名不ハ後不縮直郷ハ多磨郡不ハ入る不
ハ卷五十七下不ハ引る三代實録不元慶七年十二月二
十八日庚申授伯耆國正六位上天照高日女神從五位
下と有る上云る天照御門神の例不依る其此
時の御戸開の御功不依り然又上四百五十九不註
冠ふと奉る可き例あり四百八十九不註
る神名式不阿波國名方郡天石門別八倉比賣神社大
嘗新と有る此同神なりと云ハ同國神名帳と云物不
在名東郡佐那河内村称天磐戸別神社と云る其社地

の佐那河内村の佐那(本國)伊勢の佐那神社を移し
 奉れるより本國の地名を稱ナツけたりけむ之所思ナツき
 ハ然る物ありハ倉比賣神と申すハ上ホ云る牟力雄
 神を石掠孫神と申せる對あり若て石掠ハ石窟の事
 あり其を略きてハ倉ノハ申せるありけり此を以
 ても牟力雄神と相共ハ御戸開神ハ渡らせ給へる所
 由を曉る可し仁明天皇御紀ハ美和八年八月戊戌朔
 戊午奉授阿波國正八位上天石門和氣八倉比咩神從
 五位下三代實錄ハ貞觀七年二月 授阿波國正五
 位下天石門別八倉比咩神從四位下同十三年二月

授阿波國從四位下天石門別八倉比咩神從四位上
 同十六年三月 授阿波國從四位上天石門別八倉
 比咩神正四位下元慶三年六月 授阿波國正四位
 下天石門別八倉比咩神正四位上之見え長寬勘文ハ
 天慶三年二月一日為正三位あり其て止事無き
 御社ハ渡らせ給ひけるあり 又同式ハ右社ハ無
 神社御在ハ坐す其ハ此等二一書ハ玉作部遠祖豐玉
 者造玉と有る其神(の事)あり此ハ天石門別之符
 あり奉れるハ共ハ其功用(能)ハ此ハ古事記ハ天
 小麻能等比古神社此ハ真之戸の義あり古事記ハ天
 石戸別神亦名謂攝石窓神亦名謂豐石窓神此者神御
 門之神也之有ハ合ハし聞ゆる由有ける事共
 り若て神功皇后御紀ハ神等の御名衆ハ給ハ中ハ幡

荻穂出吾也於尾田吾田節之沓郡所居之有也之有
吾田節之ハ徒伏アタフシあり徒イタツラニ寢伏て不逢之云義不統イハ
たる發語あり沓郡ハ阿波國阿波郡有て神名式信其不建布都
神社事代主神社有テ此御紀の其文不照應テ亦雅
日女尊誨之曰吾欲居活曰長岐國因以海上五十狹茅
令祭之云不係合ズ又其同し神を神名式不山城國葛
野郡天津石門別雅姬神社名神大月 次新嘗之見えたる此を
以て其沓郡之有ル古ハ然郡郷の界ハ際ニ非リ
けり即名方郡不御在リ坐ス天石門別八倉比賣神
の御名衆ありし事を知ベきあり猶此推日女尊の御

事ハ傳二十 下不ト去てむル此より立返りて雅日
女尊ヲハ倉比賣神ト多氣比賣神ト申せル事
皆考幡豊秋津姫命の亦名あり上百八十思兼神
の下不己不云天孫降臨意章第一一書不天忍德耳尊
の為妃之在コ誤ありけり思兼神妹萬幡豊秋津姫
命之云語有り又神名秘書不天照太神相殿之姫神考
幡子之姫命於春日者第四神殿坐也之有ハ春日祭詞
不攷固坐天之子八根命比賣神之並ヒて后神の謂ふ
る不遠江風土記不岐依園神社俗稱園糟垣所祭天兒
屋根命大宮比咩命也之有て神ト近ル打合て滞ル

節無き然る者あり右四百五ハハ引る皇太神宮祓
宜譜圖帳小天手力雄命天石門乃左方尔居天乃於須
女右方尔居天云々天石門乎開坐伎有る此を以て
倭姫命世記小御戸開闢神天手力男神栲幡牟二姫神
之有ハ右の手力雄神天鈿女命二神小渡らせ給ふ御
事をあむ思定む可りける借其手力雄神ハ石戸破
る手力御在し坐す神小坐せハ御戸を取て抛落し給
ふ可く將天鈿女命ハ古語拾遺小其神強捍猛固故為
名之有る如くふる其強捍タケ猛固ツヨ小任せて天照
太神の天地小照徹せざる大御光小曠るるを為す面

勝たし向ひし其大御手を奉兼りて引出し奉給ひ
け心事何う疑ひむ然るハ古事記小猿田昆古神の出
中國之神於是有り云々御紀小八十萬神皆不得自
勝相問之有り此時小古事記小故尔天照太神高木
神之命以詔天字受賣神汝者雖有手弱女與伊牟迦布
神面勝神故事汝往將問者云々有る語ある此御
詔の義を熟思ふ猿田昆古神の光小氣壓收て諸神
の得し目勝ち問得たりつるハ天字受賣神を指て
汝ハ射向ふ神と面勝神ありと詔へるハ今現小天字
受賣神の然る所作有る云々非先小日神の大御光
不行向ひ参らせ給ひて御手を奉兼る事御在し
るを取出し給ひて今度小其光神小面勝ち向ひて
問へて仰宜へるありけり其事を此小活用せし見
る實小此少し日神の御手を取奉るハ有状甚
奉りてあり所思ゆる○引而奉出ハ古事記小引
出之有る漢文小如此く書水たりし四神出生章

△の細書良海本
カ左一書曰手雄
神奉出天照大神
時引放其若信
州戸徳山則是也
と有ハ思奇
手賜物等但本
ハ信濃國と有つ
むを後人押字
ハ換らるる可
し備此

又玉垣宮段み或
髪或手當隨取
獲而掬以控出
る所見たり

第六二書の相向而立瑞珠盟約章第一一書の相對而立
あるとハ相向立而アハムキタミシテ又相對立而アハムキタミシテと云語の續きあるを
然書れたる小等しく此も奉引出るを中不而字を
挾またりし者あり古事記白檮原段少ハ控出エキイダシと書る
所も有る儲此引ハ御手を引奉ゆるめて第三一書ハ
天牟力雄神侍磐戸側則引開之者之有る引ハ磐戸を
引啓るる如く同しと記傳ハ五下ハ此少て
此神の名義著り收たり戸を引開む少ハ本より少事
御手を取て引出し奉るむ少ハ手力の優れたるむ神
を充てて事ありしと云れたるハ手力雄神ハ御戸

を引啓けさせ給ひ天鈿女命ハ御手を取て引出し奉
る如く少て御戸開神の二柱少て持別させ給へりし
事を思漏されたりし者ありし然れど其ハ大人の
誤りなりと云ふハ
非ず此御紀の文の者も過なるあり始て古書の中
に一よりして全き者非るが故に説の此も及むたりし
者も儲上四百六ふ引る古語拾遺も爰令天牟力雄神
引啓其扉遷座新殿之有ハ此所不當る文あるが其引
啓其扉と云ハ右不云る如く手力雄神の御功用あり
遷座新殿之云ハ天鈿女命の御功用あり即天照太神
の御手を奉承りて引出し奉りつても豫て儲置たり
し新宮小移るが奉りしありけむを天鈿女命の

御名の略りて傳りつゝむ事次小則天見屋命太玉命
以日御網廻懸其殿令大宮賣神侍於御前豊磐間戸命
掃磐間戸命二神守衛殿門之有不懸令之所多を以
知へし其天鈿女命を此みてハ大宮賣神之申し御殿神と成磐天手
カ雄神を此みてハ豊磐間戸命掃磐間戸命之申して
御門神之仕奉給へる不合せ見ても其然る所縁ハ知
る事あり猶其事下五百 少云へ然るを古語拾遺不足事有
り天鈿女命之大宮賣神とを別神として其下不是太
玉命久志備所生之ハ豊磐間戸命掃磐間戸命ハ古事
記みハ天石戸別神の亦名ありて即ちカ雄神の事あり
るを其二神の下不是並太玉命之子也と云る類の安
有る事其新殿ハ迹比美夜と訓り其大宮賣神と申す

も天照太神の大宮不侍り給ふ義ありを思ふ此
時初て出来ぬ由を以て新殿と申す事ありハ有け
れ常ホ打任せて云称ハ大宮之申けし事申すも更ふ
り借此新殿ハ此の上ハ新宮之有るハ等しくハ彼
ハ上五十五下六十五註る如く新穀の初て成れる其大嘗を所
聞食む料ある齋場ありて古事記朝倉宮殿不謂歌
る新嘗屋に當る事あり故に古より新宮を迹波那
比能美夜と訓來る習し有る事あり別ありを此新殿
ハ天照皇太神之世と共に太高敷す天津朝廷の御事
を申奉れるあり遷座ハ宇都志麻世麻都流と訓べし

遷ハ石窟小御在^レ坐^一を轉^リて座^ハ豫^シ備^{ナリ}
つ^ニ新殿小令^レ坐^ニ奉^ルるを云^フあり
凡^テ遷^ルハ其所^ヲを
言^フあり古事記白檮原宮段天皇上幸の所^ニ即^チ自
日向發幸御筑紫故到豐國宇沙云^ク自^レ其地遷移而云
遷^ハ更^ニあり古語拾遺崇神天皇段^ニ漸^ク畏^ル神威同殿
不安^ク云^フ仍^レ就^テ於^テ倭室縫^ニ邑^ニ殊^ク立^テ磯城神籬奉^テ遷^ル天照太
神及草薙劍云^ク有^ル類^ハ何^レ也^ト所^ニ移^シて位^ニ住
云^フあり借^テ其新殿の狀^ハ一^ニ上^ニ百^{六十}引^ル古語拾
遺^ハ今^ニ年置帆負彦狹知二神以^テ天御量^ニ新器等^ヲ伐^テ大峽
小峽之材造^リ瑞殿^ニ古語義豆能^ク兼^テ御笠及^テ矛盾^ヲ有^ル
是^レあり借^テ此天御量の下^ニ大小^ノ雜器等^ヲ注^スる
謂^フゆる度量權衡の起^ル是^レあり此^ニ年置帆負神彦狹知神

ハ身度尺度の神^ノ度^ヲ給^フ事^ヲ已^ハ不^レ傳^フ七
三^十天御量柱の事^ヲ就^テ云^フ上代^ニ八尋殿八拳劍
九^下九拳劍十拳劍八咫鏡^ヲ云^フハ身^ヲ以^テ度^スる事^ヲ也
御祖神の天御柱を立^テ八尋殿を作^リ給^フへる^ニ其
大御身の度を量^リて物^ヲ為^シ給^フへる^ニ其^レ引^ル
出雲風土記楯縫郡の下^ニ所以^ニ號^ス楯縫者神魂命詔之
十足^ク天日柘宮之縱橫御量^ノ年^ニ尋^テ繩^ヲ百^結八十^結
下^ニ而^テ此天御量持^テ而^テ所^ニ造^ル天下大神之宮造奉^テ詔^シ而^テ御子
天御鳥命楯部^ヲ為^シ而^テ天降^リ下^ニ給^フ之^中略^シ云^フ楯縫^ノ見^エた
縦^横御量又^チ天御量^ノ云^フハ一^ノ物^ニ二^ノ名^ヲ有^ル此^レ不^レ謂^フ

る天御量是あり桂譽重説不其天御鳥命の御鳥ハ身
取トリりて身度の事ありと云ふ然る言あり上古の宮
造ハ更鏡みし云す鏡予楯の類も各其身の度不量比比へて
造る故實あり有けるあり然る不此ありて天照太神
を遷奉る新殿ハ更あり其太神の御為尔仕奉る可き
調度ハ皆右不准入へ造仕奉る可き事あるを其太神
ハハ天石窟の内不幽居り御在し坐コけぬ其大御
身不合合せり仕奉る可き方無りし故不始て此不天御
量之云ふ器を儲作られたるありけり又其出雲風土
記ありし然り己不大國主神の八十隈不隱坐し後の

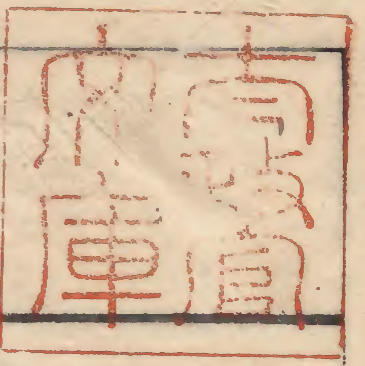
事ありけぬ其御身の長不量合す可くざる故
不縦横御量天御量以て宮をも楯をも量て造奉る
あり是世不度量と云物を廣く用ふる始ふる有け
る楯上二百七十二下不不なる如く此二神の功用各異あり
手置帆負神の手置ハ漢籍大戴礼記不布指知寸布手
知尺舒之云不同一帆負ハ度追追みり物の度を追て量計
ふる謂あり彦狹知命ハ尺知ありて天御量を指當て物
の規矩を定めさせ給ふ神不御在し坐す由あり此不
度を主ぬると尺度を主ぬるとの差異有る事を知べ
其天御鳥命ハ與神言種ハ説の如くハ手置帆負命ハ能
當りて聞ゆるあり師の赤懸度制考不右の大戴礼記
と引て寸ハ説文ハ寸十分也ハ又一と見え又ハ説文

峽之材而造瑞殿古語美豆能ハ大殿祭詞小天津日嗣
所知食須皇御孫之命乃御殿今奥山乃大峽小峽尔
立留木手齋部能齋斧手以伐操本末波山神尔祭冬
中間手持出来冬齋鉏手以齋柱立冬皇御孫之命乃天
之御翳日之御翳止造奉仕礼流瑞之御殿古語云阿良可と有る
是其事の委しも状るり但其ハ高千穂宮小初國所知
食し皇御孫尊の皇大宮を始奉りて上古の天皇尊等
の大朝廷の御有状るる古語拾遺御天降段る皇
祖天神の詔命小宜下太玉命樂諸部神供奉其職如天上
儀仍令諸神亦陪從と見えたる此を以て上世の宮造

ハ更も云す萬小天上の風儀を移傳るれけハ較略
を知へく又其此事より沂りて此天照國の日宮の大御
装束の大抵をも且て小想像り心留め奉る可き御事
小あひ有ける然れハ今現小見奉る伊勢神宮の御有
状と大祀の齋場る悠紀主基の御殿の製様あと小
ころハ天宮の停も見ゆ可き者あるし但其あも時世
ひて取捨の有つむと思しき由有て己不祝詞講義
中臣壽詞講義不云る事共有り合せ讀み曉る可き借
皇大宮の今の製様不成れる事ハ本朝事始小皇居仁
徳天皇八年庚辰三月始制漢家之從博士学宗通官王
仁之奉本朝制殿之檻觴也之見えるハ此時小上代
の制様マ漢家の制様マを相議り取捨し給ひて
定められたる者ある可し然れも古事記朝倉宮段
小幸行河内尔登山上望國內者有上堅魚作舍壺之家

天皇令問其家云其上堅魚作舎者誰家答曰志幾之大
懸主家尔天皇詔者収乎己家以天皇之御舎而造即遣
久令燒其家之有て人臣の家小堅魚木を上たると天
皇の御舎不似せし作れる由不むめさせ給へるを見
れハ仁徳天皇八年小全く漢家の制不擬りせ給へる
者之見所見さるあり且御記不依不十年冬十月甫科
課役以構造宮室之有て八年小依不十年冬十月甫科
何事と書されハ疑しきあり兼作御笠及矛盾の
御笠の事ハ已四百六みより牙ハ上二百五不云る
如く此小茅纏之稍と云ひ古語拾遺小著鐸之予と有
ハ同物ある其を作給へるを云あり但此下小豊磐
間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿門と有不合せし思ふ
小天津御門を守衛奉る威儀の物の矛盾を此小共小作儲
りぬたる者あり可し何を以て此を知ると云ふ其神

武天皇段小效氣既晴無復風塵建都檀原經營帝宅略中
日臣命師来目部衛護宮門掌其閑闔饒速日命造備矛
盾其物既備略中然後物部乃立矛盾大伴来目建仗開門
今朝四方之國以觀天位之貴之有を猶天孫本紀あり
其事を字摩志麻治命學内物部乃整矛盾嚴增威儀道
臣命師来目部帶仗掌其閑闔衛宮門矣護使四方之國
以觀天位之貴亦俾率土之民以示朝廷之重者也于時
皇子大夫學臣連伴造國造而賀正朝拜矣凡厥建都即
位踐祚賀正如是之儀竝始此時也之見之たり但此等
の儀式ハ中洲の宮都不てころハ今始ありけれ皆高



千徳宮の舊儀不依_レセ給_フ事彼宜_ク太玉命_ノ率_テ諸部神
 供奉其職_中如_レ天上儀_上と見えたる_ヲ諸部神等_ノ御_{子孫}天降_リ
 以降其職不仕奉_ルれ_テして_テ年を空_クく_ニ為_ル有_ルべき
 あり_ト物部大伴相並_ヒ仕奉_ルを是始_ト為_スべし
 天孫降臨章第四一書_不干時大伴連遠祖天忍日命師
 来目部遠祖天穗津大来日_中立_テ天孫之前_遊行降来_ト
 有_ト唯俱奉_供の為_不降坐_ト見_テ可_クあり_トあり_ト否_トあり_ト
 あり_ト心_ヲ深めて思_フ可_キ者あり_ト己_不日向_宮中洲
 宮の威儀已不然_ト上_ハ天宮の威儀正不然有_ル可_キ
 御事あり_トし神眼を此_不活_クし見_テむ_ハ天雲の

十九ノ九
 春葉校名大島隆慶

日本書紀十九ノ九
 物部大伴相並

